

今回は、韓国の女性スポーツの現状に関して、ソウル大学教授イム・ボンジャン氏の講演から、女性のスポーツ参加に対する韓国社会の背景を報告します。スポーツをすることが、韓国では新しい時代の女性のイメージにつながります。日本と同様、韓国においても女性は、観衆や選手としてスポーツに参加し、その範囲も、アマチュアから、プロ競技まで及びます。

特に最近では、女性の国際競技における活躍が目立ち、男子スポーツを凌ぐ程の優秀性を発揮して、世界的にも頭角を現すまでになってきました。それにもかかわらず、女性に対する一般的認識は、女性が持つ潜在的な可能性を無視するものとなっているというのが現状のようです。

■韓国における女性スポーツの現状■
近年、女性解放運動の台頭とともに女性権が拡張し、その活動範囲も拡大されてきました。特に男性の占有物とされてきたスポーツにおいて、女性が目立って活躍するようになりました。しかし、女性の役割が多様化した今日でも、男女差別や個人の偏见的な思考、アンフェアな態度などが旧態依然と続いています。

スポーツ界における差別の実態や、女性がスポーツに参加することに關して、多くの人が抱いている様々な先入観について考察してみることになります。

■歴史的背景■

長い間女性は、弱い存在としてイメージされ、その役割分担として主婦あるいは母親としてのみ存在してきました。歴史の流れと共に、この様な状況にも変化が起きてきました。一九六〇年代に始まった女性解放運動は、女性の歴史にも疑問を抱かせ、その結果、男性が独占的に専有してきたスポーツに対しても、多大の関心を寄せるきっかけになりました。

■男性はスポーツで男らしさを 養い女性は女らしさを損う■

スポーツそれ自体を文化人類学的に見ると、一人の男性が、成人に至る過程の儀式としての機能を備えているものとみなすことができます。スポーツは、少年を成人へと社会化する手段として用いられ、男性はそこで「男らしさ」を養うために積極的に参加してきたととらえられています。そのためスポーツは、男性にとってはその「男らしさ」を強調し、一方、女性にとってはその「女らしさ」を破壊するものとみなされてきました。つまり、女性が

スポーツを行うことは、すなわち性的役割の無視・逸脱を意味し、社会人としての障害の要因となるものであったのです。

■女性の伝統的役割はプレーヤーではなくアシスタ的役割■

スポーツは男性を象徴する概念であって、女性が所有するものではないとされてきたので、女性がスポーツ界に進出する場合も、男性と同じ様にはいきませんでした。男性がスポーツに関与する場合、自分自身のアイデンティティを獲得することが重要な要件でしたが、女性の場合は必ずしもそうではなく、ある種の社会的審判を経なければ、男性同様の評価が得られないというところがありました。

つまり一般的に、女性は美しさを証明することが強いられています。スポーツにおいても、女性の伝統的役割はプレーヤーではなく、競技的補助的役割を務めることで、このアシスタ的役割が、社会が女性に求める社会的な女性の存在意義と合致するものでした。したがって、女性がスポーツで主役を

演じる時は、多少の摩擦とある種の危険が生じることを覚悟しなければなりません。

スポーツの本質が、磨き抜かれた技術、心身の攻撃力、この双方によって勝利をもたらされるものとするならば、女性がスポーツを成就させるためには、一層の攻撃力を身につけなければなりません。このことは、本来の女性の社会的存在意義に大きく反することになります。スポーツでの女性差別は、まさにこの通常の女性差別と軌を一にするところにあるといえるわけです。

■女性スポーツに対する三つの 偏見・誤解は解消される■

①「スポーツは女性の身体に害である」という考え。
これは一つには、女性が男性に比べ虚弱体質であり、スポーツを行う女性の肉性は、筋肉質化されてしまうという誤った認識によります。スポーツが女性にとって害であるという主張は、生殖器や乳房等の機能を損い、月経周期や妊娠に多大の悪影響を及ぼすという考えですが、これは医学的見地から

事実と反することが判明しています。②「女性は男性ほどスポーツ能力がない」という見解。
これは非論理的・非合理的な偏見です。女性の能力が劣るということとは、それを進歩発達させるためのスポーツ・カリキュラムが存在しなかった結果であって、同時に男性を基準にして女性の能力を評価することは、危険な考え方と言えます。このことはオリンピックの女子水泳記録にはっきりとあることができます。一九六七年のオリンピック女子水泳記録は、男子の水泳記録の90%に達する水準であったし、その他、この数年間に過去の男子の記録を女子がどんどん破っています。

③「女性はスポーツに対して真に興味を覚えない」という主張。
これも実際、偏見といえます。近年、各種競技はもちろん、男性的競技である格闘技においても、女性の活躍がめざましく、その競技人口は増加する一方です。この様に女性のスポーツ人口が増加する一方で、各種目の女性審判員も輩出され、さらには女子選手が不在の競技でも、女子の審判員が出現しています。野球などがその好例です。このことは、女性がスポーツに興味を持っていて証拠と言えます。

■今後の韓国の女性スポーツ■
このように韓国社会において女性の社会的役割は男性に從属し、その補助的な役割を遂行することにあるとされ

てきました。そのため、女性がセルフコントロールと闘争心を大きく要求されるスポーツに適応することは困難であるとされています。しかしながら、女性のスポーツ人口が急増している今日、伝統的かつ堅固な女性に対する誤った認識やその性に対する偏見が存在している現状にあつては、これを克服し解消していくことが女性がスポーツに参加する場合の課題と言えるでしょう。

先の女性スポーツに対する三つの偏見や誤解も医学的見地から解明できるし、すぐれたトレーニングにより女性の欠点とされていたところを克服することも可能です。女性のスポーツ参加人口が増大することで、徐々に正確な女性像が作られるということが言えるのではないのでしょうか。

韓国社会における女性の地位は、長い伝統の上に築き上げられたもので、その美徳とされた価値観を一朝一夕に消し去ることはできません。女性が、男性の占有物であったスポーツ界に進出することは、この国の伝統に相反することになります。

韓国の女性スポーツ事情を通して、日本の現状を振り返ってみると、やはり同じ様な偏見や、社会的価値観が存在していることに気がきます。これをどう改めていくかは、日本のスポーツウーマンの活躍にもかかっているように

LASSALE



写真は横寸の約1.4倍です。

株式会社 服部セイコー
HATTORI SEIKO CO., LTD.

●株式会社服部セイコー 〒104 東京都中央区京橋2-6-21